

# たおやかな山並みがつづくつづく・霧ヶ峰から美ヶ原

西 正子

●2017年8月22日(火)～23日(水)

●メンバー 西A 西M

以前から「霧ヶ峰～美ヶ原の縦走」を考えていたが、中間点に宿やキャンプ地がなく、長らく保留になっていた。

ところがここ数年、山頂にこだわることなく、森林や原野、里山の道歩く「トレイルウォーク(ラン)」が注目されるようになってきた。全国的にコースが整備される中、運よくこの地域も地元「霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイル運営部会」が整備にかかり、賛同する山麓ペンションが、登山者の無料送迎に乗り出してくれた。登山道と道路がたびたび交差する山域だからこそできる技だが、こうして問題は解決し、夏の終わりの二日間、念願の山をゆっくり楽しむことができた。

## 22日 曇り・小雨

霧ヶ峰インターチェンジ(10:35)→沢渡(11:35)  
→八島湿原(13:10)→鷲ヶ峰(14:05)→和田峠  
(15:10)

平日の上諏訪発のバスは、ふもとの「霧ヶ峰インターチェンジ」が終点となる。

下車すると、いきなりの大丘陵。レーダー塔が目印の車山(1925m)を中心に、たおやかな稜線が目に見えこんできた。空を見上げるとトンボの群れ。こんなにたくさん見えるのは、空が広く、大きいからだろう。いっきに気持ちが盛り上がる。

草原の道を30分くらい登り、樹林の道を30分くらい下ると、沢渡(さわたり)に着く。おしゃれな山宿が2軒ある。スノーシューの季節には良いベースになるらしい。

そこからは幅広の道をひと歩きで、広大な八島湿原(1640m)に到着。景色を見ながら、昼食にした。

天然記念物の高層湿原には、たくさんの花が咲いている。が、さすがに盛夏の勢いはない。いっ

ぽうで、ススキの穂はきれいに出そろい、群落が涼しい風に揺れている。「秋」を感じる場所だった。

鷲ヶ峰(1798m)の登りは眺めがよい。高度を稼ぐと、眼下にさきほどの八島湿原、奥に車山の眺めが美しく、すばらしいビューポイントだ。

山頂から「ペンションなちゆるる」に電話し、迎えの車をお願いした後、下山を開始する。この頃から「霧ヶ峰」の名のとおり、あたりを霧が覆い、小雨なども降ってきた。が、幸いそれ以上は悪化せず、ラッキーだった。

下りは急傾斜で、滑る小石に足を取られそうになるが、それもつかの間のことで、後はゆるやかな登り下りが続いていた。樹林帯を抜けると車道にぶつかり、そこが和田峠(1531m)の待ち合わせ場所だった。

すぐ来た車に乗り込むが、走っても走っても先は遠い。結局40分以上もかけて、ようやくペンションに到着した。私も明彦も、近隣の宿だろうと想像していたので、この距離にはとても驚いた。もしタクシーを使っていたら10000円はするだろう。翌日もまた「私達のために」と朝食時間を早め、再び峠まで送り返してくれた。もちろん嫌な顔ひとつしない。ほんとうにありがたい宿だった。

八島湿原を見下ろす



## 23日 霧のち晴れ

和田峠(8:20)→三峰山(9:40)→扉峠(10:50)  
→茶臼山(12:35)→三城牧場(14:30)

和田峠。私達にとっては縦走路の一角だが、昔は、佐久と諏訪を結ぶ中山道最大の難所として恐れられていた。古い石碑もあり、昔の苦労が偲ばれる。

最初に越える三峰山(1887m)は、名前の通りきれいな三角錐を描いている。低いクマザサにつけられた1本道はゆったりと山頂まで延びている。緑のじゅうたんをなでる風は穏やかで、まさに山上の楽園だ。すぐ脇にはピーナスラインが通っているが、意外と気にならない。都合の悪いものを見ない能力が人間に備わっているのは、ほんとうに良いことだ。

振り返ると、今まで歩いてきた山が幾重にも重なり、車山レーダーが豆粒のように小さくなっていった。

人は少ない。この日会ったのは、反対側から来たトレラン4人組だけだった。前日も、観光地の八島湿原以外には誰もいなかった。静寂な山。そのぶん、風の音や虫の声、鳥の羽ばたきが、よく聞こえる。

霧ヶ峰といえば「車山」、美ヶ原といえば「王ヶ頭」。最高点のみ目標の人にとっては、「登る価値無し山」だろうが、山の懐に抱かれたのんびり歩きも、捨てたものではありません。

三峰山頂からは300mほどの下りが続く。途中15分ほどピーナスラインの舗装道を歩き、扉峠(1580m)に到着した。ここまで来るとゴールが見えてくる。

小休止の後は、茶臼山(2006m)を目指して最後の登りにかかる。今までとは対照的なあごを出すくらいの急登で、滑らないように慎重にすすむ。1時間くらい登ると斜度が緩み、山頂標識が見えてきた。

茶臼山山頂は展望抜群で、正面には、美ヶ原の特徴ある台地が手に取るように見えた。

時間とタクシー手配の関係があり、ここから尾根道はずれ、下山することにした。

下山道は、西方向、三城(さんじろ)牧場へと急激に高度を落としていく。針葉樹の中は日差しが届きにくく、あたり一面、しっとりとした苔に覆われている。北八ヶ岳を思い出す景色がつつく。なおもどんどん下ると、やがて道が小さな沢と何度も交差するようになり、古い公園跡に出た。

流れを左手にとり、東屋や案内板の間を抜け、平らで整備された道を進む。暑苦しいセミの音がうるさくなると、オートキャンプ場が現れ、その先が終着点、三城牧場だった。

タクシーを手配して、松本駅まで40分。縦走する人はあまりいないようで、運転手さんはとても驚いていた。

豊かに起伏した台地を逍遙する。深田久弥が「遊ぶ山」と称した牧歌的な大地をじゅうぶんに「遊んだ」2日間だった。

空が大きい



三峰山山頂

